

わすれるのもたいせつな仕事

この心理学説によれば、覚えるのが仕事であるのと同じ程度に、わすれることも一つの仕事である、ということになります。

つまり、わすれるということは、「排出作用」という一つのりっぱな仕事なのです。ですから、「習った漢字をわすれた」ということは、「頭を働かせて、頭の中にある漢字を捨てた」ということになるのです。

「そんなばかな。わざわざ頭を使って、ものをわすれるやつがあるものか」きっとそうお思いでしょう。でも、どうもこれがほんとうのようです。

生まれつき、胃袋の小さい人がいます。この人は、ちょっと食べすぎると、食べたものを吐き出してしまいます。これは、その人の意志で行なわれるものではありませんが、その人の生命を守るように「排出作用」にちがいはありません。

脳には数十億の細胞があるので、記憶作用は、まず無限だといっ

てもさしつかえがありません。頭の中が覚えることでいっぱいになるという心配はまったくないのです。しかし、それほど広い脳だけに、よほど整理して入れないと、絶対に取り出すことができなくなります。つまり、覚えつつも、思い出せない、ということになるのです。

ですから、脳の記憶貯蔵庫に収める前に、一時置き場にしばらく置き、これをえり分ける仕事がいよいよたいせつになるわけです。この一時置き場は、そんなに広くありませんから、覚えることがあまりに多く、乱雑にはいってくと、整理でききれないので、受け付けを断わったり、緊急処置として、いったん受けつけたものでも排出することになります。いつまでも整理できないでいますと、脳が異常状態に陥るので、それを保護するために、「排出(忘却)作用」があるのです。

わたしが、前の項で、「記憶体制」ということばを使いましたが、それは、一時置き場に置いて整理する働きをさしたものです。